

2020年2月9日（日）「やがてすべての口が」

マタイ 27:27-31

27 それから、総督の兵士たちは、イエスを官邸の中に連れて行って、イエスの回りに全部隊を集めた。28 そして、イエスの着物を脱がせて、緋色の上着を着せた。29 それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」30 また彼らはイエスにつばきをかけ、葦を取り上げてイエスの頭をたたいた。31 こんなふうに、イエスをからかったあげく、その着物を脱がせて、もとの着物を着せ、十字架につけるために連れ出した。

【序論】

今、ご一緒にイエス様の受難物語を学んでいるところですが、以前にも申しましたように、この受難物語の読み方には一つの注意が必要です。それは、主イエスがどういう苦しみ^に遭われたか、どういう拷問を受けたのか、そういったことばかりに目をやるのではなく、その出来事の背後にはどういう意味が隠されているのかを読み取ることが大切だということです。著者が暗に読者に伝えようとしている真理を読み取る努力をします。

さて、今日は異邦人による主イエスの集団リンチと冒瀆行為^{ぼうとく}を見ていくことになりま^す。いよいよユダヤ人の手を離れ、神との契約とは無縁の人々の中に放り込まれる主イエス。もはや主を守る者は誰もいない、そういう苛烈^{かれつ}な試練^{きら}に晒される場面です。

【本論】

本論1. 異邦人に引き渡された主イエス

それから、総督の兵士たちは、イエスを官邸の中に連れて行って、イエスの回りに全部隊を集めた。(27:27)

前回の流れで今日の箇所を見ると、総督ピラトによる不当な裁判が行なわれ、彼はユダヤ人の群衆の勢いに押されて罪なき者を処刑するという、あるまじき判断を下してしまった直後の出来事となります。ただ、後で見ますように、ヨハネ福音書によると今日のローマ兵によるリンチは、ピラトの裁判の途中で行なわれているようです(19:1-5)。

「総督の兵士たち」と聞くとローマ人の兵隊を思い浮かべるのが普通でしょうが、この軍隊はパレスチナ地方出身の異邦人によって編成されていたようです。内訳は、フェ

ニキヤ人、シリア人、サマリヤ人など。ローマ帝国の植民地であるために半ば強制的に帝国に仕えさせられていた。日頃は怒鳴り散らされ、上から頭を押さえつけられ、鬱憤が溜まっていたと思われる。

「官邸」とは、エルサレム市内でローマ総督が一時的に滞在した場所で、日常的に住居としていたわけではありません。通常は、総督はカイザリヤに居を構えていましたが、過越の祭のようなユダヤ人の祭の際に暴動が起きやすかったので、治安維持のために移動してきたのです。この時にピラトがいた場所は、おそらくヘロデ大王が建てた宮殿だったと思われます。ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパスと簡単に行き来できたということは、二人は同じ場所にいたと考えられるからです（ルカ 23:8-12）。

「全部隊」というのは、治安に当たっていた軍隊を指しますが（第二イタリア隊）、その数はおよそ 200 人と推定されています。この神を畏れぬ人々の中に主イエスはただ一人引き出され、鬻り者にされる。彼らは主イエスがこれまでに何をしてくられたかなど、事情は知らないでしょう。彼らが聞かされているのは、ローマ帝国に対して反乱を企ててきたユダヤ人の首謀者が捕まったということのみ。さんざん抵抗活動をしてきた男が、ついに刀折れ矢尽きてここに連れて来られた、そのようにしか見えないのです。

先ほども申しましたように、ヨハネ 19:1-5 によると、主イエスはピラトによる最終的な判決が下される前に鞭で打たれ、そのうえでこのリンチに遭われているようです。

そこで、ピラトはイエスを捕らえて、むち打ちにした。また、兵士たちは、いばらで冠を編んで、イエスの頭にかぶらせ、紫色の着物を着せた。彼らは、イエスに近寄っては、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と言い、またイエスの顔を平手で打った。ピラトは、もう一度外に出て来て、彼らに言った。「よく聞きなさい。あなたがたのところにあの人を連れ出して来ます。あの人に何の罪も見られないということ、あなたがたに知らせるためです。」それでイエスは、いばらの冠と紫色の着物を着けて、出て来られた。するとピラトは彼らに「さあ、この人です」と言った。

ローマの鞭打ちの残酷さは有名で、皮に小石や魚の骨が埋め込まれたもので打たれますから、全身の肉が裂けて血だらけになる。主の苦しみは更に上塗りされます。

本論 2. 冒瀆の中に垣間見える真理

そして、イエスの着物を脱がせて、緋色の上着を着せた。それから、いばらで冠を編み、頭にかぶらせ、右手に葦を持たせた。そして、彼らはイエスの前にひざまずいて、からかって言った。「ユダヤ人の王さま。ばんざい。」また彼らはイエスにつばきをかけ、葦を取り上げてイエスの頭をたたいた。（27:28-30）

主イエスは「自称ユダヤ人の王」と名乗った廉^{かど}で帝国に訴えられましたので（実際はそうではない）、この兵士たちは「それならこいつを王として扱ってやろう（痛ぶってやろう）」と考えたわけです。皮肉を込めて。

「緋色の上着」（マルコ 15:17 では「紫色」というのは、兵士が身につける赤いマントのことだと思われませんが、皇帝が纏^{まと}う紫色の礼服を模倣してイエスに被^{かぶ}せたわけです。背中^{かぶ}の傷の上に目の粗いマント…。

「いばら」は数センチの棘が突き出た弦^{つる}のことで、それを王冠になぞらえて形を作り、イエスの頭に無理やり被^{かぶ}らせた。頭にも激痛と出血…。

「葦」は、王笏^{おうしやく}を表すものとして握^{やわ}らされた柔な棒ですが、これは「こいつの王権はこんなにも弱かった」という侮辱が込められている。

このように、さんざんイエスを「情けないユダヤ人の王」として愚弄^{ぐろう}した挙句、まるで皇帝に対するかのように 跪^{ひざまず}き、接吻^{せつぶん}と見せかけて唾^{つば}を吐きかける。人間としての尊厳を奪い、高笑^{あざけ}いをもって嘲^{あざけ}った。神の子がこのように扱われたのです。ここにいじめの構図が見える。権力によって押さえつけられた人間が、自分よりも下位の者を見つけ、日頃の憂^うさを晴らす。それを止める者はなく、我も我もと無抵抗な者を痛めつける。

皆さん、ここに何が見えてきますか。福音書記者は読者に何を読み取らせようとしているのでしょうか。それは、この異邦人による冒瀆^{ぼうとく}行為のうちに隠された真理です。このようなことを行なっている者たちがまったく気づいていないところで、主イエスは異邦人の王（全世界の王）としての即位に向けて着々と歩を進めておられるのです。黙して何も語らず、敵になされるがままに何一つ抵抗をしない主イエスは、この苦難を耐え忍びながら、異邦人の間に立って彼らの救い主になろうとしておられるのです。異邦人の手に引き渡されたということは、ある意味においてはイスラエル共同体から投げ捨てられたことを意味します。神との契約から除外された者として、主イエスは尊厳を奪われた。ところが、異邦人の中に投げ込まれた救い主は、そこで異邦人の神となられる。異邦人によって擯^{なぶ}られながら、彼らの救いの礎石^{そせき}となられるのです。彼らが「ユダヤ人の王」と呼ぶところには、「イスラエルの神こそ我ら異邦人の王」という告白が真逆の状況で暗示されているのです。

更に申しますと、彼らがやっている礼拝のパロディは、やがて全世界が主イエスを神と認め、すべての民が御前に膝^{ひざ}をかがめることを予表^{よひょう}してさえいる。それがまことに皮肉な形で行なわれていながら、この激しい人間の罪の内に神の恵みが現れているのです。それは、ただただ主イエスの忍耐によってもたらされる恵みです。すべての敵意を断ち切り、本来神の子としての力^{ちから}で逆襲^{ぎやくしゅう}できるにも拘らず、迫害する者たちの手にご自分をお任せになった主イエスの血と涙によって、神の恵みが世に注がれるのです。

本論 3. 罪と救いの連帯

こんなふうに、イエスをからかったあげく、その着物を脱がせて、もとの着物を着せ、十字架につけるために連れ出した。(27:31)

兵士たちの遊びの時間が終わり、主は最後の戦いに向けて歩み出されました。十字架へと続くゴルゴタの道です。これから主は、ご自分が架けられる十字架の横木を背負い、長い道のりを一足ひと足歩いて行かれる。そして、十字架に上げられる時、主イエスの全世界の王としての即位式が完了するのです。

今日の箇所は、神の子に対する異邦人の罪を描いています。神の子を徹底的に冒瀆する人間の姿が描かれている。彼らがやっていることは、先にユダヤ人が主イエスに対してやったことと多くの面で類似していることに気づかれたでしょう。

そして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを平手で打って、こう言った。「当ててみる。キリスト。あなたを打ったのはだれか。」(26:67-68)

ここでもリンチゲームが行なわれていた。まず神の契約の民が手を出し、次に異邦の民が続く。このことも逆説的に、主の救いがユダヤ人から始まり、次に異邦人に及んでいくことを示していたのです。人類は神に対して取り返しのつかない罪を犯した。しかし、神はそれに耐え抜き、赦しを与えてくださいました。そして、その赦しを知り、罪を悔い改め、信じる者が神との新しい契約の下に入っていくのです。

神の恵みの深さがここに表されているではありませんか。これほどの人間の罪さえも、神と人とが結び合わされていくために必要な過程とされてしまうのです。自分の罪は赦され得ないと自らを責める者は、この福音に立ち返ることができるでしょう。このリンチを指揮していたと思われる百人隊長の信仰告白をもって、主の受難物語は終わるのです(27:54)。主イエスは誰のためにこれほどの苦しみを耐え忍ばれたのか。これらの冒瀆者の一人に自分自身を重ね合わせてみましょう。そのとき、私たちはその罪をお赦しになる主イエスの恵みの下に自分がいることを知るはずです。

キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(ピリピ2:6-11)

【結論】

私たちがまた、主イエスが世の終りに全宇宙の王として再臨される時、「イエス・キリストは主である」と告白する者の一人となります。しかし、この告白には二種類の意味があるでしょう。一方は、その栄光を見て、もはや主イエスが王であることを認めざるを得ない状況に立たされてしまう人々です。彼らは地上にあって主イエスを認めることがありませんでしたが、この時には渋々ながらも認め、膝を屈めるのです。もう一方の人々は、この地上の生涯において主イエスを知り、主と認めた人々です。彼らは主イエスが王として来臨される日、自分の^{あがな}贖いを完成させてくださる方とお出会いすることを心から喜ぶでしょう。既に福音を示された私たちは、主の恵みを受け入れる者になりたい。主の忍耐、主が流された血と涙を決して無駄にすることはできないのです。

【祈り】

苦難のしもべなるイエス様。イザヤ書 53 章で預言されていたとおり、あなたは苦しみを黙して耐え抜かれました。その肉体的・精神的痛みは如何ほどだったでしょうか。あなたは何のために、そして誰のために苦しみを忍ばれたか。他ならぬ私たちのためです。全世界に救いが及ぶために、すべての人に嘲られることを由とされたのです。主よ、私たちはこのあなたの姿の内に救いを見ます。私たちが愛してくださっている神の恵みを見出します。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

ひとり子の苦しみにより、世界的救済の計画を実現に至らしめ給うた、父なる神の愛。苦難のしもべとして、あらゆる苦痛を耐え忍び、屠られる羊そのものとなり給うた、主イエス・キリストの恵み。

おぞましきパロディの内に、神の愛を見出させ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。